総合討論

コーディネーター　宮下英雄*
パネラー　杉田　洋**，藤平洋子***，田中康雄****

＜宮下＞

これから，３名のパネラーの先生方を交えて，総合討論を始めたいと思います．まず，３名の先生方をご紹介いたします．

まず，ただいまご講演いただきました，文部科学省の教科調査官，国立教育政策研究所では教育課程調査官という，２つの肩書きをお持ちでいらっしゃる，杉田洋先生です．続いて，東京都教育委員会義務教育課心身障害教育係の田中康雄先生です．最後に，西東京市立中原小学校の校長先生でいらっしゃいます，藤平洋子先生です．よろしくお願いいたします．

これから，40分間という短い時間の中で，「子どもたちの心を動かす動物飼育」というテーマで，いろいろな考え方を出していきたいと思いますが，最終的には，一つの結論を出すことができればと考えております．その結論というのは，私なりに考えていることですが，動物飼育を通して子どもの心に期待する，ということです．つまり，動物飼育を通して，子どもの心がどのように変わるかということです．もう一つは，教育の中に動物飼育を機能的に教育の中に組み入れていきたい，ということです．そのようなことが見えてくればいいかと思います．そして最後に，指導する教師によって，子どもたちの心の動きが変わってくると思いますので，教師はどのようにしたらいいのか．この三つのことが，今日の総合討論を通して明らかにしていきたいと思います．そのような観点で，これから進めていきたいと思います．

進め方としては，４部構成で行きたいと思います．まず１番目は，「子どもの心が動くとは．」ということ，２番目は，「意図的，計画的に教育活動をどのように展開すればいいか．」ということについて，パネラーの先生方にそれぞれのお立場でお話しをしていただきたいと思います．そして，３番目には，「指導する教師がどのように子どもの心を耕していくか．」ということ，最後に１部から３部のお話しを踏まえて，フロアの先生方に自由にご意見をいただきたいと思います．そして，それぞれの回答を踏まえながら，３人のパネラーの先生方にご意見をいただきたいと思います．また，本日総合司会を担当されている，日本学術会議会員で，東京大学名誉教授でいらっしゃいます，唐木英明先生に，この会で話し合われた内容をすべて含めて，お話しをしていただこうと思います．また，群馬県からも学校飼育動物に関して造詣の深い桑原保光先生にもお越しいただいておりますので，桑原先生にも総括的なお話しをしていただこうと思います．そして，先ほどのような結論を導き出すことができればと考えております．

では，まず第１部から始めたいと思います．テーマが子どもたちの心を動かす，ということでありますので，子どもの心が動くということについて，どのようにお考えでいらっしゃるかということ，また，飼育動物を通して，どのように子どもたちの心の動きを期待するのか，ということについて，お話しを伺いたいと思います．

はじめに杉田先生からお話しをいただきと思います．

＜杉田＞

最近の子どもたちを見ると，心が動きにくくなっていると言われていますが，実は，データでそのことがはっきりしているわけではなくて，よくわからないというところが正直なところです．ただ少なくとも，涙を流す子どもが少なくなり，無表情の子どもがが多くなっていることは事実だと思います．心の動きということを考えていくとすれば，何らか

に表現されたものを大切にしながら，その動きをしっかりつかんでいくということが，重要だろうと思っています．

ある学校の先生は，モルモットだったと思いますが，それを２匹飼っていて，１年間の間にそれが逃げ出す事件があって，もう１匹は死んでしまった．このことをドキュメンタリーのように子どもたちを追っていったんです．そして，５人の子どもたちを抽出していました．そして，その子たちの言葉を克明に記録したんです．そして，それを見ると，確実に心の動きが深まっていることがわかります．しかし，それは様々です．すなわち，先生がかけた言葉などは同じであっても，子どもたちの行動は決して同じではありませんでした．少なくとも，様々な経験をさせることによって，心の動きを捉えていく必要がありますし，ひいては，そういうことを積み重ねて，教育活動の成果として表していくことが重要であると思います．

＜宮下＞

ありがとうございました．続いて，田中先生お願いいたします．

＜田中＞

子どもの心が動くためには，何らかの感動体験が必要だと思います．私は小学校籍で，今，教育委員会で指導主事をしていますが，担当は，理科，生活科，総合的な学習の時間を担当していますので，本会の趣旨に近いものがあります．そこで，子どもたちを見ていると，活動と指向，表現というものが，一体化していることが多く見られると思います．活動しながら考えて，活動しながら考えたことを表現していくということがあります．したがって，何らかの体験的な活動を通していくことで，子どもたちの心が動いていくんだろうと思います．その動きというのは，なかなか見えませんから，それを何らかの形で表してもらいたい．素直に表出していることは，先生方は簡単に見とれますので，表出を一歩進めて，表現させていくことができたらと考えます．

東京都教育委員会では，獣医師会の事業の中で，このことに関して作文を子どもたちに書いてもらっています．中原小学校にも今年度作文を書いていただいていますが，実際に飼育に関わっている子の作文には，子どもたちの心の動きが，私が見る限り，５つくらい類型化できるような気がします．

一つは，動物に対する気づきが深まっていることが作文から読み取れるということです．つまり，認知的な部分です．それから，動物の大切さであったりとか，動物に対する見方が深まったり，あるいは再認識しているということ，これらも認知的なことです．

それから一歩進んで，自分の変容や自分の成長を見ることができる．つまりメタ認知的なところでしょうか．そういった子どもの心の動きが見られます．

あとは，動物への愛情であったり，生命の実感であったり，そのような子どもたちの心の動きが，作文の中から読み取ることができると思います．

＜藤平＞

私は，昨年はそちらに座ってまして，手弁当で参加させていただきました．今年はこういう形でパネラーの位置に座っていますが，私自身，どのように心の動きがあったのか，ということです．私は，大人も子どもも心を動かすきっかけというものは，共通しているように思います．それは，自分が価値ある存在だと感じたときに，心は動くのではないかと思います．そして，自分が誰かの，何かの役に立っていると感じたときに感動し，次へ

の勇気を得るなど具体的に心の動きが見えてくると思います．

先ほど杉田先生がご講演の中でお話ししてくださいましたが，私たちは，この世に生まれると同時に，この命はかけがえのないたった一つのものだということは，まったく当たり前のことだったと思うわけです．ところが，子どもたちは，命がそれだけ大切だと感じることがどれだけあるのかと疑問に思うことがあります．つまり，自分を自分で肯定するという感覚がたいへん希薄になっていると感じます．そういう中で，命が大切だということを言葉で言っても，なかなか実感として子どもの心を動かすことができないと感じています．

では，どうしたらいいかということですが，まず，自分の身近にある命とのかかわりを持つことで，その対象も生きているし，それを見ている自分も生きているという実感を持つこと．つまりこれを一言で言えば，体験ということになると思います．そして，体験とは，人とのかかわりでもあるし，自然とのかかわりでもあるし，また，命をもった動物や植物とのかかわりでもあるわけです．そういうかかわりを私は「体験」としてひとくくりにしています．その体験を通して，命を大切にする心を育てていく．そして，その命あるものとのかかわりを，学校の中でどのようにもたせていくのかということが，学校現場にいるものとしての大きな課題であるわけです．

実は私は動物があまり得意ではありません．しかし，植物を育てていく中で，植物の命を体で感じることができます．毎日世話をする中で，かわいいと思うこともできるようになるし，そこからエネルギーをいただくこともできます．このエネルギーこそ生命観だと思います．それと同じように，動物の飼育を続けている子どもたちも，それを感じ取ることによって，命というものを体感できるのではないかと思います．

＜宮下＞

ありがとうございました．

今の３人の先生方にお話しをいただいて，キーワードをつくるとすれば，「感動体験」とでも言いましょうか，あるいは「価値体験」とでも言えましょうか，ということの中で，子どもたちの心が動くのではないかというお話しだったと思います．

では，そのような感動体験，価値体験を，飼育動物ということに限定した場合，子どもたちにどのようなことを与えることが，そのような体験につながるのかということについて，またお伺いしたいと思います．

では，田中先生からお願いします．

＜田中＞

体験が大切であるということは，学校現場の先生方は，よく考えていらっしゃると思いますが，体験させっぱなしのこともよくあり，この体験に何の意味があるんだろう，と感じることも少なくありません．例えば，学校を訪問し，体験活動を参観することもありますが，そこで，先生方は何をねらっているんだろうと疑問に思うこともあります．動物を飼育することで何をねらっているのか，そこを明確にすることが大切なんだろうと思います．つまり，動物を飼育することで，特別活動のねらいを実現させたいのか，総合的な学習の時間で自己の生き方を子どもたちが振り返るというねらいを実現させたいのか，それとも，理科で，観察・実験の技能・表現であるとか，科学的な見方・考え方であるとかという面を養いたいのか，というようなねらいをしっかりもつということが大切なんだろうと思います．

そういう意味で，ちょうどいい提案をしていただいているのが，今日いただいた資料の中の，西東京市立保谷第二小学校の「総合的な学習の時間における飼育の指導」という，Ａ４判１枚の指導計画です．このように，学校として，子どもたちが飼育動物に関わるときに，どういう目標を設定していくのか，明確にしていくことが，非常に大切なことなのではないかと考えております．

＜宮下＞

ありがとうございました．

今，田中先生の方から，目的意識をしっかりともった上で，進めていかなければいけな

いのではないかということについて，お話しをいただきました．

このことにつきまして，藤平先生いかがでしょうか．

＜藤平＞

学校を経営する立場として発言させていただくことになりますが，今の田中先生のお話の延長上で，教育課程の中で，動物を飼育するということを位置づけて取り組んでいるということを最初に申し上げたいと思います．

それで，どういう位置づけかと言いますと，４年生全員の児童に，年間を通して，総合的な学習の時間の一つとし，併せて，特別活動の委員会活動で，全員が飼育担当とすることとの，二つの活動に位置づけて取り組んでいます．それぞれにねらいがあり，重なるところもありますが，目指すべきところは，「命を大切にする心を育む飼育活動」ということで，取り組んでいます．

＜宮下＞

ありがとうございました．

次に杉田先生にお伺いしたいと思います．今，お二人の先生方から，やはりもう少し教育課程に明確に位置づけることが必要であるというお話しをいただきましたが，先生のお立場で，全国の小学校をご覧になったとき，はたしてどれほどそのようなことが言えるのかということについて，お話しいただければと思います．

＜杉田＞

教育課題は山積しておりまして，このことも，教育課題の一つであります．

今お話しいただいた，教育課程にどう位置づけるかということを，学習指導要領にどう書き込むかということと考えれば，それは非常に些末な問題となってしまうわけですが，これは必ず入ってきます．道徳活動がすべての教育活動を通して行うのと同様に，命の大切さを育む教育というのは，一教科領域で取り組めるような薄っぺらなものではないです．教科も充分に行う必要もあるでしょう．知的な理解も必要です．それから，体験も必要です．体験にも特活的な体験と，課題追究のような総合的な学習の時間における体験も必要です．

基本的には，すべての教育活動にこれをどう位置づけていくか，学校経営の視点も重要だと思います．したがって，どこかだけが突出して，例えば生活科だけでやろう，となったときには，たぶん変質します．教育課程はそういうものではありません．それぞれの教科は目標をもっています．その目標に照らしてしっかりやれば，結果として，命を大切にする教育に資するというような，そのような考え方が非常に重要だと思っています．

また，国の立場から言えば，いくらきれい事を言っても駄目でありまして，これを，全国の都道府県，あるいは市町村教委にどうアプローチしていくかということが，大変重要であろうと思います．

＜宮下＞

ありがとうございました．

それでは，今，教育課程の問題に入ってきているわけですので，先ほど言いましたように，第１部を終えて第２部に移りたいと思います．

教育課程というものは，常に意図的，計画的にそれを編成して，進めていかなければいけないわけですが，学校の現場の中においてそれをどのように進めているのか，話を進めていきたいと思います．しかし，先ほどのご発表の中にもありましたが，校長先生の間でもかなり温度差があるということがありましたので，そのようなことも踏まえながら，徹底的にお話しをしていきたいと思います．

まず，現場の校長先生として，藤平先生どのようにお考えでしょうか．

＜藤平＞

西東京市では，５人の校長がこの会に参加しております．それだけ，市の教育委員会，獣医師会のバックアップがあります．その結果，学校飼育動物が，他の市町村から比べれば，かなりいい状態にあると思っています．そういう背景の中で，中原小学校も２羽のチャボがいたんですが，１羽死んで２羽が加わり，３羽になり，さらにウサギ２羽を，４年生中心に飼育しています．そして，４年生の学年チームが，１年間熱い思いを，子どもたちに，そして，飼育動物にかけてきたことによって，このカリキュラムが支えられたという背景があります．それと同時に，一つ下の３年生の時に，カイコの飼育を通して，生き死にを体験させるというウォーミングアップをしてきました．このことは，教員の資質にかかわることがあるということと同時に，獣医師会の応援がなければ，カリキュラムを組むことも，実践を支えることもできなかったと思います．

＜宮下＞

今のお話しでは，４年生が中心になってい

ますが，やはり３年生の段階から見通しを立てて教育課程を編成していくということでした．

では，東京都教育委員会のお立場として，それぞれの教育課程の編成について，どの程度の充足率？があるのか，ということを踏まえながら，少しお話しをいただこうと思います．

＜田中＞

公立の小中学校，幼稚園については，直接東京都の教育委員会が携わっているわけではないので，学校飼育動物の飼育状況について直接的に何かを申し上げる権限はありませんが，私どもとしては，その学校が，特色ある教育活動の一貫として，動物を飼育を通して，子どもたちの心を豊にしていきたいと考えている学校がたくさんあるということは把握していますので，その状況の中で，東京都が行っている施策等を利用していただければと考えています．ただ，それは東京都だけでできることではないので，東京都の獣医師会にご協力をいただいています．例えば，東京都教職員研修センターで，学校飼育動物に関する研修を毎年行っています．今年度は延べ３２９名の参加者があったと聞いています．そのようなことであるとか，また，私の上着にバッジがついていますが，これをご覧になった方はほとんどいらっしゃらないと思いますが，入り口でこのバッジを付けていらっしゃった方がいたのでとても嬉しかったです．これは，「心の東京革命」ということで，子どもたちの問題は大人たちの問題であるということで，動植物の栽培や飼育を通して，命の大切さを子どもたちに学ばせましょうという施策です．また，先ほどちょっとお話しをしましたが，子どもたちが動物を飼育した経験を作文にするということで，東京都獣医師会の事業に協力をするという形をとっています．

このようなメニューを提供して，おもに小学校に対して，学校づくりの協力をしています．

＜宮下＞

ありがとうございました．

それでは続きまして，杉田先生から，各都道府県を総括的にご指導いただいているお立場から，教育課程の中で，このようなところをもう少し改善することによって，子どもたちの心を豊かにするためにさらによい方向に向かうのではないかということがありましたら，お話しいただきたいと思います．

＜杉田＞

いろいろ思いはありますが，教育課程の編成権は学校長にあるものですから，今お話しがあったとおり，教育委員会にできることは非常に限られてくるだろうと思いますが，少なくともいろいろメッセージを出していくことは必要だと思います．教育委員会にはそういうことが施策としてできます．たとえば，この学校飼育動物の問題を学校管理の視点で捉える，少なくとも教育の問題として捉えることが，必要だと思います．とかく教育委員会は管理的な側面から学校を見ますから，まず，そこをどのように考え方を転換してもらうかということが，一つの視点であるだろうと思います．

それから，今お話しがあったように，学校差が大きいということがあります．それを埋める手だてがいくつかあるだろうと思います．たとえば，資料の作成と配布，研修会なども一つの手だてだと思います．そういう意味では，群馬県は桑原先生が教育委員でいらっしゃるということで，そのようなことを進めやすい環境にあると思います．だから，あれだけのトップクラスのことができるということだろうと思います．それもどなたかが思いを発して実現をしていくわけで，その第一歩をどのように進めるか，重要なことだと思います．

私は，教員の10年目研修の時にチャボを連れてきて，参加した先生に扱ってもらって，それをみんなで批評し合うというようなことをやったことがありますが，いかにリアリティーをもたせるかということも含めて，いろいろな工夫をしていく必要があると思います．また，北九州市に昨年お邪魔したとき，このような総合討論を開いて，確実に前に進んだというようなことも伺いました．このようなことはとても大事なことなのではないかと思っています．

ただ，このようなことが，教育を司っているわれわれが主体になるのか，獣医師の方々が主体になるのか，という議論にしていってしまうと，難しい問題になってしまいますので，教員が主体性をもって，この問題に正面から取り組んでいくことも必要ではないかと思います．

＜宮下＞

ありがとうございました．

今，杉田先生から，全国的に素晴らしい取

り組みを行っていることをご紹介いただきながらお話しをいただきました．できるだけ，そのような情報がどんどん私たちの視野に入ってくることで，いろいろな県で，市で，学校でというように，取り組みが広がっていくのではないかと思います．

では，第３部に移らせていただきます．

今までお話しいただきましたように，感動体験，価値体験，そしてそれを進めるための教育課程の編成について進めて参りました．そこで，実際に子どもたちに指導するのは担任の先生です．その指導者が，飼育動物を通して，子どもたちの心を耕していけるかどうか，そこが大きな鍵ではないかと思います．このことに関して，少しお話しをいただきたいと思います．

＜田中＞

私も平成１３年度までは小学校の教員をしておりました．そして，一度だけ，クラスでジャンガリアンハムスターを飼った経験があります．

そこで，自分に対する自戒の念も含めて，お話ししたいと思います．先ほどもお話ししましたが，教師がねらいをきちんともっていると，こどもたちがそのねらいを実現した姿になっているか，日本の先生方は，自然に思っていると思います．そして，このことは意味のある言動だと思ったときは子どもを褒めたり，認めたり，みんなに広げたりします．もし足りないことがあれば，子どもたちに助言をします．そういった流れが，子どもたちが学校で動物を飼育しているところで，日常的に展開されていると，動物を介して子どもたちの心が育っていったり，科学的な目が養われていったりするのではないかと思います．ですから，動物を飼育することで，こどもたちに，こんな姿を期待したいというねらいを明確にしていくことが，大切なんだろうと思います．

それから，この会の第３号の会誌の中に，「効率的」という言葉が出てきましたが，教育の中での効率とは何なのか，例えば，子どもたちの心を動かすために効率がいい手だてとは何なのかを考えてみます．教育では，時間が短いことが効率がいいことではなくて，どれだけねらいを実現させることができたか，それが効率なのだろうと思います．だから，体験を通して時間が１年かかっても子どもたちの心がいい方向に動いたのであれば，それは効率がよかったということになるのだと思います．そんなふうに考えていっていただければよいのではないかと思います．

＜宮下＞

それでは，子どもたちを直接指導されている先生方をご覧になりながら，また，西東京市だけでなく，いろいろな学校の現状もご承知であると思いますので，その辺も踏まえながら，少しお話しをしていただければと思います．

＜藤平＞

先ほどの群馬県のアンケートにもありましたように，飼育を担当する教員は本当に少ないです．これには二つの原因があると思います．一つは命を預かる重荷です．もう一つは，一年中関わらなければいけないという時間的制約です．この二つを乗り越えて，子どもたちに命の大切さを伝えるために飼育が必要なんだと思える教員は，心のモチベーションが高い教員です．

もう一つ大切なことは，私自身自分で感じたことなんですが，飼育はとても大切なことで，自分もそれに関わることによって育っていくし，そういうことを実体験していないと，ふだんの飼育活動に関わることができないんだろうと思います．お陰様で，中原小学校は，市や獣医師会のバックアップがあるということで，動物の病気やけがの時には相談することもできますが，そうであっても，先生方の苦労は言葉では言い表せないほどのものがあります．そのような先生方を，私は管理職として抱えているわけです．その重みも十分感じられます．そういうことを乗り越えて，年間を通してこつこつと飼育活動を続けることによって，命の大切さを子どもたちが感じ取れるようになり，心の成長へとつながるものだと思っています．

＜宮下＞

それでは，杉田先生に，先ほどのご講演ともダブることにもなろうかと思いますが，子どもたちの心を耕すには，教師は子どもたちに対してどうしたらいいのかということについて，少し強調してお話しいただければと思います．

＜杉田＞

その前に，一部の教師だけが飼育に携わるということで成果が上がることではないと思います．そして，学校差が大きいと先ほどありましたが，それよりも，教師差，つまり個人差が大きいのではないかと思います．そういう意味では，熱心にやっていただく方は，

自分の時間をなげうってでも熱心にやっていただけますが，関心のない方はまったくやらないという二極化の現象があります．最低限のところで何が大切かという発想が大事であって，学校差が，時には学校長差であることもあったりして，群馬県で管理職相手の研修をしていただくことは，非常に効果が大きいことであると思います．

また，教育課程の中で，先ほど課題山積と言いましたが，そういうことを踏まえた上で，手に届く範囲の課題をどう解決していくか，管理職の先生であれば，どの教科でどのようなことを最低限やる必要があるのかということを，きちんと考える必要があると思います．校長先生が替わると，対応がまったく違うということでは，こういうことに対する成果は上がりにくいのではないかと思います．

それから，私は姿勢というものが非常に重要であって，こういう活動は，教員が教えるとか躾けるとかいう考えを捨てていくことが非常に重要だと思います．子どもと共に泣いたり笑ったり悩んだりすることができる教員でなければ，このような飼育活動に対する成果を期待することは難しいと思います．ある意味，このようなことは教員として当たり前のことですが，今度の答申の中に，情熱のある教師と敢えて書かなければならない実情があることで，そういうところからスタートする必要があるということなのかも知れません．

それから，教育の機能で一番大切なことは，褒めるということですが，その褒め方励まし方が，教員の観点によって違ってしまうということですから，そのところの共通理解を学校としてどうとっていく必要があるのか，ということがとても大切なことではないかと思っています．一つには，生活科や理科担当だけが飼育活動に携わるということではなく，校務分掌の中で機能的に組織していくことが必要なのではないかと思います．

＜宮下＞

ありがとうございました．

今，杉田先生から私たちにとても重要なご示唆をいただいたのではないかと思います．

３人の先生方にもっとお話しをいただきたいところですが，制限時間を回ってしまいましたので，今度はフロアーの方々に，これまでのお話の内容などを受けて，御質問やご意見がございましたら，挙手をしていただければと思います．

＜嶋田＞

東京都の嶋田と申します．

動物が好きか嫌いかという教員対象の調査で，確か２割近くの先生が動物が嫌いだというお答えがあったと思いますが，その２割の先生方も当然管理職になり得るわけです．そうすると，根底から崩れていってしまう．先ほど杉田調査官が情熱ある先生をとおっしゃっていましたが，そのような先生方を育てていくことが非常に大切なのではないかと思います．その２割の先生方に教わった子どもたちは非常に悲劇だと思います．子どもたちは先生を選ぶことができませんから．その辺をどのようにお考えでしょうか．

＜田中＞

東京都では，採用の時に，パッション，情熱があるか，ミッション，使命感をもっているか，アクション，行動力があるか，そのような人材を求めるべく，選考しています．研修については，今申し上げることはできませんが，今年度，都立の学校で様々なことが起こりまして，その都立の学校に入学する前の小中学校において，生命尊重の教育はどうすべきなのかと，いうことを現在大きな課題として検討しておりまして，もしかしたら，研修の制度が変わるかも知れないというところです．

＜宮下＞

未来の先生の中には，動物が嫌いな先生も確かにいますが，嫌いな先生も絶対に好きになると私は思います．というのは，私の教え子に次のような先生がおりました．小学校３年生を受け持っていて，教室でどんな昆虫を飼いたいのか，子どもたちに聞いたところ，カブトムシやクワガタムシのような格好いい動物を挙げる子が多かったのですが，教室の中でいじめられている子がいて，その子がダ

ンゴムシと答えたわけです．そうしたところ，その先生が「私もダンゴムシ大好きだよ．」と言ったわけです．その次の日から先生の悲劇が始まりました．次の日からその子は毎日ダンゴムシをもってくるようになり，その先生はついにダンゴムシが好きになりました．だから，そのような積み重ねによって，私は先生の気持ちも変わるだろうと思います．

＜杉田＞

横浜に，超ベテランの先生がいました．その先生はムシがさわれません．ムシがさわれなければムシを用いて命を大切にすることができないかというと，そんなことはないとはっきり言ってました．それは，教育者としての思いをきちんともてばいいんです．生理的なものもあるので，動物が好きだと言った8割の先生方がいい指導をしているとは思えないし，嫌いだと言った2割の先生が悪い指導しているとも思えません．この問題は少なくとも教員養成の問題が関わってくるし，大学のカリキュラムの問題も関わってくることです．また，採用のシステムも関係してくるでしょうし，免許更新制のようなことも関わってくると思います．少なくとも，重要性が認識できれば，そのような問題は解決できるのではないかと思っています．

＜宮下＞

藤平先生いかがでしょうか．

＜藤平＞

私は実はそういう教員でした．イヌを抱っこすることもできないほど毛嫌いしていました．でも今，命の教育をやっております．

＜宮下＞

ありがとうございました．

他にいかがでしょうか．

＜小林＞

熱心な先生がいても，認識していないというお話しでしたが，今，学校現場で，生命尊重の教育や動物飼育について，大切だと認識していないところは一つもないと思います．そこで，文科省の指導要領などで，「すべての学校で動物を飼え」と言いっぱなしにされてしまって，戸惑うのは現場の学校です．そこのところが今お話しされていた問題点なのではないかと思うんですけれども，たった一つ，学校獣医師制度でしょうか，そういう制度が確立すれば，現場の教員はとても助かるのではないかと思います．そこのところをすり替えて，現場の先生方の認識が足りないと言われてしまうと，現場は非常に困るのではないかと思いますので，そこのところを是非お願いいたします．

＜宮下＞

ありがとうございました．

そのことは，皆さんよくわかっていらっしゃることだと思いますが，もう一度考えていく必要があることだと思います．

議論が白熱しているところですが，時間の制約がありますので，先ほど申しましたとおり，唐木先生から総括的なお話しをいただこうと思います．

＜唐木＞

今日のテーマである，「飼育動物が子どもの心を動かす」ということについて，私の専門である生理学から見てどういうことなのかと言うことをお話しをしたいと思います．

そのキーワードは「愛着」と言うことです．愛着というのは，すべての動物がもっている感情で，基本的には，母親が子どもにもっている感情です．これは，脳の中にバソプレッシン，オキシトシンという物質が出てくると，愛着という感情が出てくるわけですが，母親は子どもに対して，自然とそのような感情を抱くわけです．そうすると，この子のために何かをしてあげたいと思い，名前を付けてあげたり，死んだら悲しいという感情が生まれたりします．専門的に言うと「利他行動」と言います．すなわち，その子のために何かをしてあげたいという感情が生まれる．これが「愛着」という感情です．

では，飼育動物を通して，子どもの中に愛着という感情をどのようにして生み出させればいいのかというと，先ほど教育の目標は知・徳・体とありましたが，その「徳」の部分です．また，知・徳・体というものは生理学の考え方とまさしく一致します．

「知」については，陳述記憶と言いまして，

脳の海馬がそれを司っているわけですが，これは説明ができる記憶です．学校で勉強することはすべて陳述記憶です．次に「体」の部分は，小脳が司っている記憶で，これは，言葉で説明できない記憶です．体の動かし方や泳ぎ方，自転車の乗り方など「体のふるまい」の記憶です．そして，いちばん大切な「徳」の部分は，エピソード記憶と言いますが私は思いで記憶と言っています．これも海馬の部分に蓄えられる記憶で，これはいろいろな体験の中から出てくる記憶です．

そして，これが動物とのふれあいのどのようなところから出てくるかというと，動物とのふれあいが短期間の場合は「知」の部分が出てきて，陳述記憶しか生まれません．これは当たり前のことで，このことも非常に大切なことです．そして，エピソード記憶である「徳」の部分が出てくるためには，ある程度長期間のふれあいが必要になってきます．その中で感動体験が絶対に必要であるということは，先ほどのお話のとおりです．その間どう体験の中から愛着が生まれてきます．ですから，動物とのふれあいの中からどのようにして感動体験を生み出すのかということが大切なわけです．そして，最後にお話しになった，教員の明確な目的意識ということが絶対に必要になってきます．しかし，2割の先生方が動物が嫌いであるということが問題にされましたが，その先生であっても，愛着の心は必ず持っています．ただ，それを活性化しなかっただけの話で，やはり先生自身も動物とふれあうことによって，愛着をもつようになり，子どもたちを指導する上でそのことがとても大切であると，私は考えています．

＜宮下＞

ありがとうございました．

では，続きまして，群馬県の教育委員もされている獣医師の桑原先生よりお話を伺いたいと思います．

＜桑原＞

私がただ一つ皆さんに申し上げたいことは，子どもたちに，身近なところで愛情をもった飼育をさせるにはどうしたらいいか，ということがいちばん大切であるわけです．そういう条件を子どもたちにどう整えてあげたら，今の多頭飼育や，動物愛護の観点から見たら悲惨な状況からどうしたら脱却できるか，そのときに，獣医師と連携をとって，子どもたちのためにどのような教育を与えることができるのか，心の教育の一環として，いかに有効な教材であるかという位置づけをもたせたらいいのかということが大切なのではないかと思います．難しいことではなく，身近なものを大切にする心を育てるために，身近な動植物から育てていくということ，その一つの方法として，動物飼育があるのではないかと思います．ですから，いかに動物を大切にしようとする気持ちを育むために，その環境整備を先生方とわれわれ獣医師が手を組んで，一歩一歩解決していくかということが今の最大の課題でもありますし，そこから取り組まないと，なかなか前に進まないのではないかと思います．

今日集まっている方々は積極的な考えをもっている方々なので，一歩一歩，学校の飼育環境を改善して行く必要があるのですが，例えば，多頭飼育を止めようとか，身近な愛情飼育にしていこうとか，それをどうしたらいいかわからない先生方もたくさんいると思いますので，この研究会を大きく発展させて，先生方と獣医師が手を組んで，学校獣医師を制度化し，命ある動物を学校で大切にしていこうという動きが出てれば，大きな壁も乗り越えていけるのではないかと思います．

とにかく，明日からまた，子どものために全力を尽くしていきたいと思っています．

＜宮下＞

それではこれで総合討論を終わりにしたいと思います．ありがとうございました．

(*全国学校飼育動物研究会長)
(**文部科学省初等中等教育局教科調査官)
(***西東京市立中原小学校長)
(****東京都教育委員会指導部指導主事)

研究会に参加して

田中康雄

近年，情報化社会や情報技術が進展し，間接体験やバーチャル体験が膨らんでいます．一方で，都市化や少子化，地域社会における人間関係の希薄化などがますます進行し，子どもたちの豊かな成長に欠かせない直接体験の機会が乏しくなっています．特に，命のかけがえのなさや死という厳粛な問題に対しては，具体的な体験をよりどころに，感動したり，驚いたりしながら，その思いや考えを広げ，深めていくことが欠かせません．

こうした状況を踏まえると，学校の内外を問わず，子どもたちに対して生命の尊厳を実感できる機会を意図的に設けることが必要です．

平成11年に石原慎太郎東京都知事は「心の東京革命」を提唱しました．これは，次代を担う子どもたちに対し，親と大人が責任をもって正義感や倫理観，思いやりの心を子どもたちにはぐくみ，人が生きていく上で当然の心得を伝えていくための取組の必要性を訴えるものです．平成12年８月に策定した「心の東京革命行動プラン」では，「動物や植物の世話をさせ，命の尊さを学ばせよう」と呼びかけるなど，東京都では，命を大切にする子どもたちを育てる施策を推進しています．

東京都教育委員会においても，東京都公立全小中学校で道徳授業地区公開講座を実施していただくなど，心の教育の充実に力を注いでいます．特に，学校飼育動物については，社団法人東京都獣医師会が進める「学校動物飼育モデル校事業」を，子どもたちが様々な生き物に触れ，感じ，考えながら，生き物を愛護し，生命の尊厳を実感する教育の一層の推進に資する意義深いものと位置付け，後援しているところです．

このような中，全国学校飼育動物研究会第４回研究大会が開催されました．テーマが「子どもたちの心を動かす動物飼育」ということで，子どもたちの心はどう動いたのか，その要因として動物とどんなかかわりがあったのか，指導者はどんなかかわりをしたのか，の三つを視点に，一日参加いたしました．本研究会に携わる方々の熱い思いに大変刺激を受けたとともに，学校での動物飼育の意義を再確認できた貴重な時間となりました．

事例報告やパネル展示など，一点一点に対して述べることは紙幅の関係でかないません．しかし，子どもたちの心を動かす実践報告には，指導者のパッション（情熱）とアクション（行動力）が大きくかかわっていることが実感できました．

私としては，学校における動物飼育や動物介在教育には，以下の３点が必要と考えています．

①ねらいを明確にした意図的・計画的な動物飼育
②ねらいに適した，負担過重にならない動物飼育
③学校の教育計画に位置付いた組織的な動物飼育

つまり，学校における動物飼育の実践の教育的価値を一層高める要件として，ミッション（使命感），コラボレーション（連携・協働），オーガニゼーション（組織）が必要であると考えています．

文部科学省 杉田洋 教科調査官は講演で，動物飼育を通して「命の教育」を効果的に行うためには，動物飼育の目的をしっかりと見定めて，教科等の指導計画に位置付け，獣医師などと連携を図りながら，意図的，計画的，組織的に指導していく重要性を述べられ，意を強くした次第です．

圧巻は，顧問の唐木英明先生によるパネルディスカッションのまとめでした．学校教育のねらいである［生きる力］の心の側面である「豊かな心」をはぐくむことと動物飼育との関係を，最新の脳科学や認知科学の面から意味付けていただきました．［生きる力］の知の側面である「確かな学力」の定着への敷えんも期待でき，パネリストながら強く興奮を覚えました．

私はパネルディスカッションで「学校動物飼育モデル校事業」での作文から，動物飼育による子どもたちの心の動きに，①動物への愛情，②生命の実感，③動物への気付き，④動物との関係性への気付き，⑤自己の成長への気付き，などが見られると述べました．一方，動物飼育の効果として研究会誌の中で，獣医師の中川美穂子先生は九つ，顧問の無藤隆先生は三つを示されました．本研究会には，学校における動物飼育が子どもたちの［生きる力］の育成にどう寄与できるか，心情面や認知面で子どもたちにどんな成長をもたらすか，すぐれた実践においてねらいが実現された要因は何かなど，唐木先生のまとめを基に，実践的かつ理論的な研究を進めることを期待します．

学校における動物飼育の一層の充実を図るには，行政，学校，家庭，地域，獣医師などが連携し，意図的，計画的，組織的に当たることが大切です．

今回の研究大会で得られた成果を参考にしつつ，学校における動物飼育や動物介在教育の一層の充実を図るため，微力ながら力を尽くす所存です．

（東京都教育庁指導部
義務教育心身障害教育指導課指導主事）